

大野市教育環境調査研究委員会 会議結果概要

日 時：令和7年2月7日（金）午後7時00分～8時15分

場 所：結とぴあ 2階 201・202号室

<出席者>

大野市教育環境調査研究委員会 出席者名簿

No.	所属等	氏名	分 類	備 考
1	国立大学法人福井大学	まつき けんいち 松木 健一	第1号委員	理事・副学長
2	大野市小中学校校長会	やまだ よしのぶ 山田 善信	第2号委員	和泉小中学校校長
3	大野市区長連合会	まつた とよじ 松田 豊治	第3号委員	
4	大野市PTA連合会	おやま かつや 尾山 勝也	第3号委員	会長
5	大野市立保育園保護者 連合会	やまもと あや 山本 彩	第3号委員	副会長

大野市教育委員会出席者名簿

No.	所属等	氏名	職 名	備 考
1	大野市教育委員会	くぼ としたけ 久保 俊岳	教育長	
2	大野市教育委員会	よこた あきひろ 横田 晃弘	事務局長	
3	大野市教育委員会 教育総務課	とくら いくよ 土蔵 郁代	課長	
4	大野市教育委員会 教育総務課	やまかわ りゅういち 山川 龍一	学校教育審議監	
5	大野市教育委員会 教育総務課	おおくぼ かつのり 大久保 克紀	課長補佐	
6	大野市教育委員会 教育総務課	もりなが な お こ 森永 奈緒子	課長補佐	
7	大野市教育委員会 教育総務課	みやした きんや 宮下 欣也	企画主査	

<傍聴者>

2人

大野市教育環境調査研究委員会次第

と き 令和7年2月7日（金）

午後7時より

ところ 結とぴあ201・202号室

1 開会、委嘱状交付

2 教育長あいさつ

3 正副委員長選出

4 議事

（1）大野市教育環境調査研究委員会について

（2）大野市の教育の現状について

小中学校再編の現状

中学校部活動の現状、休日地域移行の進捗

通学区域変更

18年をつなぐ教育、大野っ子育成プラン

学校数及び児童生徒数と学級数の推計

（3）教育の現状や展望について＜18年をつなぐ教育＞

松木健一 福井大学理事・副学長から講話

（4）今後の大野市の教育に関する意見交換

5 その他

6 閉会あいさつ

1 開会

2 委嘱状交付

3 教育長あいさつ

委員の皆様には、足元の悪い中、出席いただきお礼申し上げます。松木委員には感謝申し上げます。

雪に翻弄されている今日この頃だが、非常に嬉しいニュースが飛び込んできました。陽明中学校2年生の村松徹郎さんが長野で行われている全国中学校スキー大会のクロスカントリー競技フリーの部で7位入賞を果たした。147名出場の中での入賞ということで、大変頑張ってくれたと喜んでいる。彼は、昨年まで和泉中学校1年生として過ごしていて、今年度の春から陽明中学校2年生になった。1年生から3年生まで全部で4人の和泉中学校の生徒が陽明中学校へ入ってくれた。

本年度、2中学校の新体制がスタートした。違う学校からそれぞれ集まってきた生徒が、互いに尊重しながら、新しい学校文化を造ってくれていることを本当に嬉しく思っている。1年後には小学校の再編を控えている。この学校再編というのは、学校の統廃合だけで終わることではない。大野市の学校再編という大事業を好機に教育環境のあらゆるところを整理していくという気持ちでやっている。

本日の委員会でもいくつか報告させていただくが、部活動の休日地域移行や、有終西小学校と有終東小学校の校区の変更や、18年をつなぐ教育ということを進めている。すべてこの教育環境の総合的な整備の中で一丸となってやっているところである。

本日は、それぞれ再編に関わりのある委員さん方にご参加いただいているので、松木先生のご講演をいただきながら、これからの大野市の子どもたちのことを一緒に考えていけるとありがたいと思っている。

一言お礼とお願いを申し上げ、私のあいさつに代えさせていただく。

3 正副委員長選出

委員長に松木健一委員、副委員長に山田善信委員を選出することを、全会一致で決定した。

4 次第

(1) 大野市教育環境調査研究委員会の役割について

――事務局から資料配布、説明――

(2) 大野市の教育の現状について

――事務局から資料配布、説明――

(3) 教育制度の現状や展望について（18年をつなぐ教育）

【松木委員長から説明】

18年間の子どもの成長について話をしたい。特に幼稚園保育所段階、小中学校段階、高校段階というように私たちは子どもの成長には段階があるように思っている。ところがその段階と子どもの発達はずしも一致していない。小学校段階というものがあるわけではなく、小学校の真ん中頃に子どもが成長する段階があって、その変化を乗り越えるように小学校の仕組みができあがっている。中学校の仕組みも同じである。そんな話をしようと思っていたが、雪もひどいので、本日はまず今の学校が抱えている課題を共有したい。

- ・福井大学では、4年前よりエジプトの現職の先生が毎年150名ほど福井に来られ、その先生方に研修を実施している。

- ・日本人のイメージとしては、北アフリカにあって地中海に臨むエジプトについては、ピラミッドとナイル川ぐらいかと思う。

- ・エジプトの人口は、ほぼ日本と同じ1億2000万人になろうとしている。

- ・宗教はイスラム教徒が多い国である。

- ・女性の多くはヒジャブをかぶっており、ヒジャブというのは、スカーフを巻いたような姿である。

- ・ヒジャブを巻いていない女性の先生もおられ、宗教には寛大な国でもある。

- ・酒を飲まないのも、研修の間に甘いものを召し上がる女性が多く、幾分偏見かもしれないが、日本人よりもふくよかな方が多いように思う。

- ・エジプトの人はアラビア語を話し、翻訳は許されていないので、原則イスラム教の国ではアラビア語が使われている。

- ・エジプトの方の意識として、アラブの盟主であるという自負があるように感じられる。

- ・石油はあまり出ないため、近隣の国から比べるとオイルマネーはない。
- ・しかし、部族長が王となっている近隣諸国と違い、古代より長い歴史と優れた文化を持つ国として、アラブ諸国を牽引してきたという自負があるように思う。
- ・アラブ諸国に学校の教師を派遣している実態もある。
- ・近年、急激な人口増加によって国自体が活気を帯びているように思う。
- ・エジプトが日本の学校教育の何を学びに来ているのか、なぜ福井なのか。
- ・日本の学校は古い言葉で言えば、知徳体を学ぶところである。
- ・エジプトの学校では、学校は知識を学ぶところと位置付けられている。
- ・先生は、子どもたちと一緒に登校し、授業が終われば帰ってしまう。
- ・職員室という部屋がない学校もある。
- ・先生は、知識を教える人である。
- ・徳はモスクが教え、宗教が倫理や道徳を担っている。
- ・体力づくりである健康は、地域のスポーツクラブが担っている。
- ・人格は知徳体が結びついて形成されるものであり、それが別々に行われていては人格教育にならない。
- ・学校へ通う子どもたちが富裕層の視点で占められていた頃は、家庭教育がしっかりしていたのでそのような学校で成り立ったが、急激な人口増の時代、それでは成り立たなくなった。
- ・人口増加とともに、貧富の格差が広がってきた。
- ・このような実態の中で、経済成長を実現し、国政を高めるためには、すべての国民が高い教育を受けることができる学校が必要になったわけである。
- ・倫理や道徳を宗教に頼ると新たな問題も起きてきた。
- ・イスラム教の中では、現状に対する不満から過激な宗派が成立し、世界的な社会不安を引き起こしている。
- ・安定した国づくりには知徳体のバランスのとれた教育が求められている。
- ・ここでエジプトが目をつけたのは、日本の学校である。
- ・日本の学校では、知だけではなく、すべての教育を行っている。
- ・朝の会に始まり、帰りの会までの間に、道徳の授業があり、学級会があり、給食指導があり、栄養管理や食事のとり方まで指導する。
- ・体育はもちろん、部活動の指導や先生と一緒に清掃指導まで行っている。清掃を行うことは、西洋型の学校ではほとんど見られないのではないかと。

- ・夏休み等の休暇の指導から、地域の行事参加、また、運動会や学芸会、音楽祭までである。
- ・子どもに関連するすべての活動に学校が関わり、子どもの生活全般から全人格的な教育を行っているのが日本である。
- ・エジプトの大統領が日本の学校を訪問し、給食指導や清掃する子どもたち、登校する際に学校に向かって挨拶をする子どもたちの姿を目撃して感動し、礼儀正しく清潔で約束を守る日本の国民性に合点がいき、日本型の学校をエジプト全国200校、日本のODA（政府開発援助）の支援を受けて造ることになった。
- ・現在、日本型の学校が50校できており、その学校の教員の研修を福井大学が一手に引き受けている。
- ・福井大学を選んだ理由は、日本型の学校教育のモデルとして、学力の高い福井県を選んだことと、学校の先生方の研修システムが整備されている大学は、全国でも福井大学しかないからである。福井大学は全国の教育学部のフラッグシップ大学として文科省から指定を受けている。
- ・日本の学校教育が次第に世界から評価されるようになった頃、皮肉にも、日本のこのような学校の姿が危機に直面している。
- ・学校がブラック企業として揶揄されるようになり、教師の過重労働がマスコミで取り上げられ、働き方改革の名のもとに、日本型の学校の良さが今まさに失われようとしている。
- ・部活動は地域に任せ、お勉強以外の仕事は教師から極力切り離そうという雰囲気次第に拡大しつつある。
- ・部活動の切り離しは、大野市の場合は、教師の仕事の軽減もさることながら、少子化によって集団で行うスポーツチームがつくれなくなってしまって、競技スポーツが成り立たなくなってしまうことが主な理由である。
- ・さらに働き方改革として、校外での教員研修や時間外の研修を極力減らし、学校で残業をしないように管理するようになってきている。
- ・このような傾向は、学校にとって、子どもにとって、教師にとって、そして保護者にとって、果たして本当に良いことなのか。
- ・このような学校をめぐる状況が続くと、日本の教育が本来持っていた優れた育成能力を失いかねない。実際、日本の教育の持つ良さを失いつつある。
- ・失いつつある育成力には3つある。
- ・1つは、子どもの学力である。

- ・学力とは、知識技能を覚えることだけではなく、子どもの生活力であり、人と関わる力であり、生きる力の低下である。
- ・子どもの学力の低下ですぐに気づくのは、学校が知識技能の習得に特化してしまうことで、子どもの生活する力や、人と関わる力のすべてが、1人の人格の中に統合されて、生きる力として育まれるプロセスがなくなってしまうのではないかという危惧である。
- ・エジプトなど海外の発展しつつある国が日本の学校教育の優れているところとして評価し、今まさに学ぼうとしている点が、家元である日本では失われつつあるというのが何とも皮肉な話である。
- ・エジプトの先生方の熱意と、国を挙げての教育改革の動向を見ると、四半世紀も経たないうちに、今度は日本が日本型の教育を海外から学ばなくてはならなくなるような気がしている。
- ・このような危機感を踏まえ、日本の学校教育の良さを生かし、日本の教育を発展させようと、文科省は指導要領を改定し、個別最適な学びと協働の学びを学校教育の中心に据えようとしている。
- ・現在、次の10年に向け指導要領の改訂作業が始まろうとしているが、方向性は大きく変わらないと思われる。
- ・2つ目は、教師の資質能力の低下である。
- ・現在、働き方改革の中で、教員研修を軽減しようとしているが、これはタコが自らの足を食べているようなもので何とも悲しくなる。
- ・教師は専門職であり、子どものような純真な優しさを持ち続け、子どものような探究心を何歳になっても失わず、そして子どもと一緒に感動することができる資質能力が必要である。
- ・これらの能力は、与えられた生来のセンスだけでは長続きしない。
- ・絶えず実践を振り返り、子どものことについて学び続けることができるからこそ維持できる専門性である。
- ・子どもに共感し感動できなくなった教師は、もう教師ではない。
- ・探究心のない感動しない教師からは、子どもは何も学ばないからである。
- ・子どもの探究心は、探究心を持ち続ける教師の姿を見て、真似て学ぶものである。
- ・このような心を維持するためには、教師は学び続けなければならない。

- ・このまま研修の機会を放棄するようでは、教師は魅力の失せた尊敬もできないただの人になってしまう。
- ・そうなる情報量があり、より細かく緻密に教えてくれるタブレット先生の方がマシということになる。
- ・働き方改革に必要なことは、勤務時間の削減以上に、教師の給料を上げること、学級規模を小さくすることが最も優先事項のように思われる。
- ・学び続けようとする資質を持った人に先生になってもらうことが大事である。
- ・3つ目は、保護者の教育に関わる資質能力の低下である。
- ・学校を駄目にし、教師を駄目にした要因で最も大きい要因の1つは保護者だと思う。
- ・教師の多忙を引き起こしている理由の1つは、保護者の苦情対策である。
- ・学校では、保護者の苦情に対応すべく、言い訳仕事が増えている。
- ・連絡漏れに気を配り、何か言われたときに備え、子どもに関わる時間を割いて記録を残すという余計な仕事に教師は忙殺されている。
- ・この問題は、日本型学校教育の良さを保護者が勘違いしているところから出発している。
- ・日本の学校は、子どもの成長に関わるすべてのことを行っているため、全人格的な教育ができるのだが、このことが誤解を生む。
- ・保護者は、教師がすべてを行っていることについて間違っ理解していて、学校で起きたことは学校に責任があり、学校は無責任だと責める。
- ・学校は子どもの教育のすべてに関わってはいるが、すべてに責任があるのは学校ではなく保護者である。
- ・何か問題が起きた時、学校を責めるのではなく、共につくる教育を考える。
- ・日頃から学校と対話し、協働していくことが、最も重要だと思う。
- ・このような対話の機会を設けても、参加しない保護者との間でしばしばトラブルが起きてくる。
- ・先生と保護者が我が子のことではなく、教育のあり方そのものについて話し合うことが、子どもを育て、学校を造り、地域を育てることになる。
- ・現在の学校の姿は、世界から評価されつつある日本の学校教育の良さを、教師と保護者が自ら壊そうとしているように思う。とても悲しいことである。
- ・私は、大野市のように少子化に伴い学校の存続が危うくなっている町こそ、新しい学校のあり方を考える最適な場所だと思っている。

- ・市民の方々が自分ごととして、学校の問題を考えようとしているからである。
- ・ピンチこそチャンスだと思える。
- ・大野に来ると、毎回必ず進取の気象を育てた明倫の心について唱える。
- ・大野は、人と人との結びつきを大切に結の故郷であると大野の人は言う。
- ・それなら、みんなで力を合わせてチャレンジしようではないか。
- ・それが大野人の気象のはずである。
- ・文科省は、令和の日本型教育の推進を掲げ、指導要領を改訂し、主体的で対話的で深い学びの実現に向け取り組んでいる。
- ・個別最適な学びと協働の学びについて、すべての教科で進めようとしている。
- ・個別最適な学びについては、ＩＣＴの目覚ましい進歩が背景にある。
- ・このような時代だから、情報活用能力の育成が求められているのはもちろん、子どもたちの学習プロセスも大きく変化してきた。
- ・必要な情報はタブレットを開けば、必要なだけ得ることができる時代になった。
- ・何かを習得するプロセスについては、一人一人の個性に合わせて学習速度を変え、その子の特徴を生かしながら、各自の学びに合わせて学習を進めることができるようになった。
- ・極端な話だが、学校へ行かなくても、タブレット等を用いれば知識の習得ができるようになった。
- ・裏を返せば、知識を教えるだけなら、教師よりもタブレットの方が優れている分野も出てきている。
- ・だからこそ知識の習得だけではなく、子どもの生活力や人と人との関わり合う能力を持って、直面する課題を解決するような能力、全人格的な学びが必要になっている。
- ・誰もが知っている歌を取り上げてみたい。
- ・「世界にひとつだけの花」ＳＭＡＰ
- ・この歌によって励まされる人がいて、何となく気持ちが優しくなり、頑張ろうという気持ちになってくる。
- ・人は元々それぞれが特別な存在であるというメッセージは以前からあった。
- ・「私と小鳥と鈴と」金子みすゞ
- ・槇原敬之氏より１００年以上前に、金子みすゞは「みんなちがって、みんないい」と歌いかけている。

- ・一人一人のあり方が大切にされない時代、一人一人の生き方を認めて欲しいという願いは切実なものであったに違いない。
- ・現代社会にも似た状況があって、S M A Pの歌に心惹かれるのかもしれない。
- ・社会や権力におもねろと言うわけではないが、どの時代でもメトロノームのように個人の自由と社会の構成員としての資質の両極端に揺れていて、それで良いのかということである。
- ・槇原氏や金子氏の歌にはそういう危ういところが潜んでいるように思う。
- ・私たちは絶えず社会の構成員としての資質についても、目を向けていなければいけない。

<教育基本法>

第1章 教育の目的及び理念

（教育の目的）第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

- ・私たちは、教育の目的が人格の完成と社会の形成者の育成であることを知っている。
- ・人格の完成ということのみを取り上げれば、人格は一人一人違うので、みんな違ってみんないいということになる。
- ・しかしもう1つ、教育の目的は社会の形成者の育成を目指して行わなければならない。
- ・社会を形成するということを前面に出すとすぐ、ルールや規範を守らせねばという話が出てきてしまう。
- ・ルールや規範を守ることがいけないわけではなく、そのことがそのままルールや規範を教えなければいけないという教育に変質してしまうことに問題がある。
- ・人は元々1人では生きていけない存在だが、時々人は1人で生まれ、1人で死んでいく存在だと言われたりする。
- ・人は関係の中に生まれる。
- ・人は生まれた瞬間から、養育者という存在なしには食べることも安心して眠ることもできない存在なのである。だから生まれて最初にすることは、泣き声をあげて、養育者に世話をするように求めることである。

- ・他者と関わり合う中で成長し、次第に自己の存在が確認できるようになり、主体性が育まれていく。
- ・死ぬ時もやはり見守られて死にたいと願う。
- ・主体性を涵養^{かんよう}することと関わり合うこと、すなわち社会の形成者を育むことは、対立するのではなく、重なり合って育つのである。
- ・言い換えると、主体性と社会の形成者としての資質は対立しないのである。
- ・ところが私たちは、主体性を育て、社会の形成者としての資質も加えて育もうとすると、足し算をしてしまう。
- ・主体性は、自ら「する」ということが本質であるし、それに対し、社会の形成者としてルールや規範を身につけることを重視すると、「させられる」ことになってしまう。
- ・「する」と「させられる」は、二律背反の関係になってしまう。
- ・2つを足し算をして、2つを身に付けさせようとする、矛盾した教育を行ってしまうが、この2つは二律背反する関係ではない。
- ・主体性は関わりの中で生まれ、関わりは主体性を育む中で生まれるものである。
- ・今学校では、子どもたちの主体的で対話的な学びを実現しようとしている。
- ・具体的には、個別最適な学びと協働の学びである。
- ・この両者は、別々に学ぶものではなく、相互に影響し合った学習活動の中で実現できる。
- ・具体的な例としては、子どもたちが地域の課題に協働して探求し、課題の解決をする中で育ちやすいものである。
- ・そういう学びを実現するためには、地域と学校が一緒になって取り組む姿が求められている。地域と共に創り出す学校教育である。
- ・これから大野市は人口減少に伴う学校の再編が問題になってくと思うが、単に学校を統合すれば良いという問題ではない。
- ・学校の問題は、地域づくりの問題でもある。
- ・発達したICTとネットワークを活用しながら、大野市では、新たな学校像の模索が続くと思われる。
- ・その中で、教育の問題は子どもの課題であると同時に、私たち自身が私たちのwellbeingをどう捉えるかという私たちの課題でもある。

【副委員長】

先生のお話を聞いて、先日テレビで観たイチロー選手の言葉が思い起こされた。メジャーリーグで殿堂入りした時の記者会見の場だったと思うが、イチロー選手が子どもたちへ伝えたい言葉として、自分の能力と、能力を生かす力は別物だという話をしていた。まさに学校はその両方を育てていく場だと思う。いろんな知識を学ぶことで自分の能力が高まっていくのだが、能力が高まったからといって、それが生かせるかどうかはまた別の問題である。イチロー選手が言っているのは、自分の能力を伸ばすための力というのはまた別の力だということをおっしゃっていた。今いろんな教育の言葉が出てきたが、これから学校は、子どもたちが自分の能力を自分で伸ばせるような力をつくっていかないといけないと感じた。小中高とそれぞれの段階はあるが、それぞれの段階で、子どもが自分の伸ばしたい能力を自分でどんどん伸ばしていけるような力を学校で育てられたら良いと思う。学校が世界から評価されている部分がなくなってくるという大変耳の痛い話だったが、それでもやはり学校としては、子どもが自分の夢を実現できる力を育てていきたいということを先生のお話を聞いて改めて考えさせられた。

（４）今後の大野市の教育に関する意見交換

【副委員長】

大野市では、今年度から中学校が再編されて、令和８年度から小学校も再編される。自分のいる和泉小学校は昨年までは小・中学校だったが、今年から和泉小学校だけになった。私としては喜ばしい反面寂しい思いがあったが、陽明中学校に行っている子どもたちと何回か話をする機会があり、どの子も陽明中学校が本当に楽しいと言っていた。その言葉には若干ジェラシーもあるが、子どもたちが陽明中学校に行って良かったと言ってくれていることが本当に嬉しい。紅葉まつりのイベントなどでも、陽明中学校で新しく友だちになった子と一緒に来ていたりする姿を見ながら話を聞いていると、やっぱり和泉中学校では提供できなかった多様性や人の繋がりなどが大きく広がったのだろうなと思っている。そういった意味で本当に和泉の子たちにとってこの再編というのは、可能性を広げる大きな機会、チャンスなんだということをすごく感じている。また令和８年度の小学校の再編でも、阪谷小学校や小山小学校の子がそういう思いをするのではないかと感じている。

【山本委員】

率直な意見として阪谷小学校が全校生徒20人というのは寂しいと感じる。少人数で良いところもあり悪いところもあると思っている。自分が子どもの時は人数が多い下庄小学校だったので、学校が終わったらそのままスポーツ少年団の練習に行くという環境が当たり前だと思っていた。阪谷小学校では団体競技ができないので、やらせてあげたい気持ちもあるが、送り迎えが必要になるため選択肢がなくなっていることが難しいと思う。今後、やりたいことをやらせてあげられるのか心配である。再編を通して良くなっていくことを期待している。

【尾山委員】

私は大野で生まれて、大野の高校を卒業してそのまま就職したという本当に大野人である。小学校から高校まで野球をやっていて、大野で野球をやっていたので大野で野球を教えたいと思い、今は少年野球の指導をしている。家が七間通りで妻がカフェを経営しているので、商店街の事業にも携わっている。私がどうしてこんなふう到大野のことでいろいろ動きたいかということ、先ほど松木委員長の話にもあったように、多分当時出会った大人たちが生き生きしていて、探求する姿勢をどこかしらで感じていたからではないかと思っている。

【松田委員】

自分の子どもが小学校の時は森目小学校に通っていて、非常に人数は少なかったのだが、そこから富田小学校に行った時には、やはりいろんな友だちもできて、スポーツなどに関しても自分がやりたいことをやれたし、人との付き合い方なども学べて非常に良かったと思っている。大人は学校が統合すると、通学距離が遠くなって面倒くさいなどと思う人もいるが、やはり子どもを中心に考えるとそういうこともしていかなければならないと思う。統合した時に教育の点で少し心配するのは、新しい学校で伸び伸びとできているかということである。もしそうでないところがあるなら、そういうことがないようにお願いしたい。

それから、子どもがどう育つかというのは学校の教育も非常に重要だと思うが親がどのように育てているかということも、子どもの育ち方に大きく影響してくるのではないかと思う。

【松木委員長】

大野市は、福井県で一番面積が広いが、子どもの人数だけをみれば10年も経たないうちに1小1中で十分な大きさになってしまう。それをすぐに統合すれば良いだろうか。私はそうは思えない。もっと別な道があるように思う。

すごく困難かもしれないが、そういう新しい学校の在り方を本当に提案できるのは、大野市のような市であると思う。単に1小1中に絞り込んでしまえば、それに見合った形でまた人口も減る。そういうものを目指すのか、そうではない学校の在り方を目指すのか。そのためには保護者の方も一緒に取り組む学校でなければ新しい学校の姿を目指すことはできないと思う。新しい試みを大野の良さを生かしながら、進取の気象と結の故郷であることを考えながら、やれるのではないかと考えている。みんなで力を合わせて進んでいくことが新しい可能性を開いてくれるのではないかと。みなさんに頑張っていたきたい。

6 閉会

【副委員長】

しばらく前になるが、非常に気になるニュースがあったのでご紹介したい。

他の市町の話で決して非難しているわけではないが、保護者の方から新聞社に投稿された記事が載っていた。中学校の登校に関する事で、非常に校区が広いので、冬になると自転車で通えない。そこでPTAでお金を出し合ってバスを借りて、学校まで子どもを送迎しているそうだ。それが少子化に伴って、そのバスの料金がひと月で1人3万円かかり、子どもが2人いる家庭では、バス代だけで月6万円かかることになる。本当に大変なことである。その記事を読みながら大野市の中学校再編のことが頭をよぎった。大野市の再編では、非常にたくさんのスクールバスが各地から子どもを乗せて学校へ運んでくれている。年度ごとにバス停などの見直しもされているが、そういった意味で、大野市の再編は子どもファーストな部分が本当にありがたかったと感じた。

学校の新しい形ということがいろいろ言われているが、そこには子どもファーストかどうかということが一番大事なのではないかと感じている。これから子どもたちにとって何がベストかというのを、我々は学校関係者だが、行政とも手を組みながら考えていかなければいけないし、地域の皆さんの意見の中で、子どもの意見も最も大事になってくると思うので、そういった意味での大野の教育がこれからどんどん新しい姿に変わっていくと良いと感じた。

本日は長時間にわたり意見交換いただき、感謝申し上げます。

終了 午後８時１５分